

アイヌ英雄叙事詩成立過程の時間層

— ユカラ⁽¹⁾におけるイシカラ⁽²⁾人の役割 —

中川 裕

1. 英雄叙事詩の成立に関する二元的起源説

アイヌの英雄叙事詩⁽²⁾成立の時代背景についての一九八〇年代までの議論は、英雄叙事詩がヤウンクル「陸の人…本土の人」とレプンクル「沖の人…海の向こうの人」の対立を描いたものであるということを前提として、それらが歴史上の何を指すかということに集約されてきたといえる。その発端をなし、現在でも最も影響力の強いものは、知里真志保が知里（一九五三—四）等で唱えた、ヤウンクル⇨擦文人、レプンクル⇨オホーツク人という図式であり、英雄叙事詩がその抗争を描いたものであるという説である。オホーツク文化は五、六世紀前後より樺太南部から北海道のオホーツク沿岸部にかけて広がり、擦文文化は七、八世紀前後から北海道内に展開した文化である。それらの文化を担った人々は互いに形質的にも異なる人々だったと考えられている。そして九世紀末頃までにオホーツク文化は擦文

文化に吸収・同化され消滅し、その擦文人が現在のアイヌ人の祖先となったというのが、今日まで一般的に言われてきていることである。

知里真志保はその考古学的な知見を前提に、英雄叙事詩の起源について次のように論じた。

「ユーカーラと云うのは、北海道を本拠とするヤウンクル（内陸人）「本州人」「北海道本島人」と、大陸の方から海を越えてやって来て北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭堡を確保して住んでいたレプンクル（渡来の異民族）との民族的な戦争の物語」（知里一九五三—四・一九七三—五七）

「この頃は、もう部落全体が孤立していたのではなく、異民族の侵入に対して、本土の連中が一致団結して部落連合というようなものを作り、総指揮者をおし立てて戦っているのである。そして、そのような共通の敵に対する団結を通して、同族意識を高揚し、自覚し、そこに、後世のアイヌという一つの民族を形成する地盤が作られていくのである」（同上）

当初、アイヌ文化研究の枠組みの中では、このように英雄叙事詩の内容を歴史的事実と結びつけて論じることが、むしろ否定的に扱われたが、知里の死後、一九七〇年代に入ってから日本北方史を専門とする歴史家が、この問題を取り上げるようになった。その先鞭をつけたのは海保嶺夫であり、彼は海保（一九七四）でヤウンクルⅡ和人、レブンクルⅡアイヌ人と考え、英雄叙事詩が一六六九年のシヤクシヤイン戦争あたりの時期を背景にして成立したのではないかという説を提起した。後に工藤雅樹は、海保と同じく十七世紀前後を舞台としながらも、むしろアイヌ人グループ同士の抗争を描いたものだという見解を示した（工藤一九八六）。ただし、両者ともその説をその後発展させて論じている様子はない。

それに対し榎森進は、それまでに刊行されている英雄叙事詩のテキストを、特にそこに登場する地名について綿密に調べ上げ、その結果、ヤウンクルを「一つの河川を中心にして形成された河川共同体そのもの」「石狩や余市などで代表される集団も、かかる集団と血縁関係を有する同質の集団」（榎森一九七九・八九）と帰結し、レブンクルをそれとは異質な集団として位置づけた。そして、ヤウンクルを擦文人、レブンクルをオホーツク人という歴史上の集団に同定し、知里説を全面的に支持する見解を示した。榎森はこの説をその後も堅持し、二〇〇四年に札幌大学ペリフェリア・文化学研究所主催で開かれたアイヌ口承文芸に関するシンポジウムでも、知里―榎森の

この説が議論の中心となった（本田編二〇〇五がその報告書である）。

しかし、知里説もふくめ、これらの説には全体として共通する問題がある。それは、これらが物語群全体としても個々の話についても、アイヌの英雄叙事詩を、同じ時代に、同じ出来事をきっかけに、一度に形成されたということを前提にしているということである。これを一元的起源説と呼んでおくことにする。この一元的起源説については、すでに中川（一九八九・一九四―一九五）で簡単な批判を加えているが、ここではより具体的に多層的起源説に基づく分析を行うことにする。すなわち、ひとつのジャンルが成立するにあたっては、個々の話においても部分的な形成・変容・伝播があり、またジャンル全体としても色々な変種が異なる時代に形成・変容される。そして、それらが相互に重なり合いながら異なる地域に伝播した結果、その物語群が現在の形になったのだと考える。

2. 英雄叙事詩の時間的多層構造

2. 1 ジャンル名および主人公名の地域差

アイヌ英雄叙事詩という用語でくくられるものは、実際には地域によってジャンル名称および主人公の名前が異なることが、金田一京助によって早くから知られている。表1は、金田一（一九三二）における記述を整理したものである。

表1：英雄叙事詩の地域的なジャンル名と主人公名の変種

名称	伝承地域	主人公
ユカラ	さる 沙流・胆振 <small>いぶり</small>	シヌタフカ人 (ポイヤウンペ)
ヤイラフ (ヤイエラフ)	室蘭地方から口蝦夷にかけて	オタサム人
サコロペ	石狩・手塩・十勝・釧路・北見	オタサム人
ハウ	日高	オタサム人、 オタスツ人
ハウキ	樺太	オタスツ人

なお、実際のテキストではポイシヌタフカウシ「小シヌタフカ人」、ポノシタス「小オタスツ人」のように、ポシ(ポイ)「小さい、若い」をつけた名称や、省略形とみなされる名称が使われることが多いが、ここでは便宜上「地名+人」という形で主人公の名前を示す。また、ポイヤウンペ(またはポイヤンペ)は、おもにシヌタフカ人に対して用いられる別称である。

知里(一九五五・二〇一・二二)も、ほぼこれに近い分布状況を記している。ただし、現在得られるテキストは必ずしもこれとは一致しない。まず、ユカラとシヌタフカ人の分布範囲は表1より広く、千歳、静内地方にまでおよぶ。また、表1では石狩はサコロペの地域だが、同地出身の砂沢クラ氏の伝承は

ユカラという名称らしく、主人公もシヌタフカのポイヤンペといふことになっている。ただし、「クラさんのお母さんは川村ムイサシマツといつて、金成マツさん、平賀サダモさんの友人であった。金成さんが旭川におられた頃はムイサシマツさんと二人でよく『ユーカーラ』をして楽しめたという」(浅井一九七二・二六五)という記述もあり、砂沢氏が幌別(金成)、沙流(平賀)の伝承の影響を強く受けている可能性は大である。歴史的な分析の資料としては、金田一らの記述を優先すべきであろう。

一方、オタサムとオタスツの分布も、表1のように明確なものではなく、釧路地方の英雄叙事詩として現在唯一公刊されている八重九郎氏のサコロペのテキストでは、主人公はオタスツ人であり、釧路に近い白糠の貫塩ぬきしおキシ氏のサコロペでもオタスツ人である。また、胆振地方幌別の金成かんながらマツ氏のヤイラフでは、オタスツ人が主人公で、オタサム人がむしろ主人公に倒される側に回っている話がある。金田一の胆振地方の英雄叙事詩に関する情報の大きな源泉のひとつが金成氏であったことを考えると、この点は時代的な変容といふことで片づけることはできないだろう。さらに、金田一の記述では言及がない日高地方東端の様似でも、ヤイエラフが記録されており、この主人公はやはりオタスツ人である。

このように、オタサム人、オタスツ人には明確な分布地域の区分ができず、現在確認できるテキストでは圧倒的にオタスツ

人が多い。そこで、ここではシヌタツカ人との対比のために、両者を区別せずオタスツ人で代表させて扱うことにする。

こうした地域的な差について、すでに金田一は一九一四年に「して見ると、凡そアイヌ民族の古謡にポイヤウンベ」【著者註…シヌタツカ人】を主としたユカラと、ポノタシウトウンク【オタスツ人】を主としたハウと二つの系統があつて、沙流及北海道の南方地方は重にポイヤウンベを伝えて居、樺太及び北海道の北部地方は重にポノタシウトウンクを伝えているのであるらしい」（金田一一九一四…解題四）と述べている。これは多層的起源説の嚆矢といえる発言であり、その点で、後の知里説などより優れている。ただし、主人公名の分布からすれば、オタスツ人の話は胆振にも日高にもあるのだから、樺太および北海道の広範な地域において英雄叙事詩の主人公はオタスツ人であり、日高西部および胆振を中心とする地域にのみ、シヌタツカ人を主人公とする話があるということになる。この分布から考えれば、オタスツ人の話が先にアイヌ人の居住域全体に広がり、その後には沙流・胆振の地域でシヌタツカ人の話が成立したと見るほうが、自然な解釈である。

奥田統己も「仮に樺太から英雄叙事詩が成立したとして、第一波、第二波というふうになつてきた。あるいは樺太から成立した第一波的な英雄叙事詩は金田一京助の言うところのオタストウンクルの英雄叙事詩、それからそこを母体にして、北海道の西南部で第二波的に虎杖丸のような英雄叙事詩が発生した。こ

んな議論ができるとおもしろいことになるのではないかと思つています」（本田編二〇〇五・一四四）と、述べている。主人公名の分布からみれば、後者の説のほうが蓋然性が高いといえる。

2. 2 地域による内容的差異

「英雄叙事詩の地方名は」これらはいずれもただ主人公の名がちがうだけで、物語の筋も歌い方も大同小異である」（知里一九五五・二二一）

「英雄叙事詩の地域変種は」名称は異なっても、吟誦の仕方も、内容も、ほとんど同一で、一篇の主人公の名と発祥の地を異にするに過ぎない」（久保寺一九七七・一五一）

英雄叙事詩の地域的変種の内容面について、これまではこのような説明が一般的であり、また沙流・胆振地方以外の採録例が圧倒的に少ないために、これまでの英雄叙事詩の説明はユカラを中心になされるのが普通であつた。それが一元的起源説の根本的な要因となつている。しかし、それ以外の地域のテキストや、ユカラ以外のジャンルの資料が次第に公開されるに従い、内容面においても地域差があることが看取されるようになってきた。

釧路の八重九郎氏の伝承を中心に英雄叙事詩の分析を行つてきた萩中美枝は、次のように述べている。

「八重九郎さんのサコロベに關して」なおこのように地上以外の世界に住む神々などが主人公に敵対することは、現在知られている沙流地方や胆振地方の英雄叙事詩ではまれであ

る。これに対して、静内町に在住していた織田ステノさんの語ったユカラにはそうした構成のものがしばしばみられる」(秋中一九九五：三三二)

ただし、実際には沙流地方の伝承でも神々や近親者と戦う話があるからず記録されており、この点においては、決定的な差があるとは言えない。それに対し、奥田統己は、知里真志保の掲げた「部落連合の総指揮者」という主人公のイメージについて、次のように述べている。

「ところがこの『部落連合の総指揮者』のイメージが表れるのは、僕の今見ている限り、北海道内であれば沙流川流域と胆振の資料にどうも限られているようです。織田ステノさんや八重九郎さんの英雄叙事詩をご覧になると、そういう主人公と同格のリーダーというのは全然出てきません。織田さんや八重さんが描くのは、むしろ『孤独な英雄』とでもいべきイメージです」(本田編二〇〇五：一三六)

私見でもこの観察は正鵠を得ていると考えられる。すなわち、沙流・胆振の伝承は、内容的に他の地域と異なった特徴を持っているのであり、2.1で述べたことと考えあわせれば、それはこの地域で後から形成されたものだということになる。したがって、この特徴をアイヌ英雄叙事詩全体の起源と結びつけて論じるのは危険であるという奥田の論旨に、筆者も賛成する。

その上で、沙流・胆振の伝承には、ここでいう「部落連合の総指揮者」という特徴に加え、それとおそらく密接に関連する

であろうもうひとつの大きな特徴がある。それについて次節で論じることにする。

3. イシカラとイヨチ

「ユーカーラに登場する具体的地名では、山丹、樺太、礼文島、余市、石狩など日本海沿岸に関わる地名が圧倒的に多く、かつ、シヌタプカの地は、石狩川と距離的に近い関係にあるものとして描かれていることからすると、石狩川に近い、ある河川共同体を舞台にしていることは明らかである」(榎森一九七九：九四)

アイヌ英雄叙事詩の舞台を現実の地理に位置づける解釈としては、これまで上記のような認識が一般的なものであった。しかし、実際には、英雄叙事詩の中に多数登場する地名において、これらの物語群を日本海沿岸に結びつけているのは、おもにイヨチ(余市)とイシカラ(石狩)の二つだけだといつてよい。サント(山丹)、カラフト(樺太)は、少なくとも北海道の語り手にとつて、実際にどこにあるのやらわからないほど遠い土地の名前であったろうし、レプンシリ(礼文島)をはじめ英雄叙事詩に登場する多くの地名は、実際には語源的に地形名称そのものであって(レフ「沖」ウン「の」シリ「土地」、特定の土地に結びつけられるとは限らない。

一方、イヨチ、イシカラは単純な地形名称ではなく、同じ条件の当てはまる地域にならどこにでもつけられる名前だとは考えにくい。特にイシカラは、クスル「釧路」やトカフチ「十勝」と同様、語源不詳の名称であるため、語り手・聞き手にとっては現在石狩として知られている地域のみを想起させる地名であつただろう。このふたつの地名が登場する話が数多く記録されていたからこそ、ユカラが日本海沿岸を舞台にしたものだという解釈が成立するのであり、後述のように主人公の住むシヌタフカは架空の地名であるから、イシカラとイヨチが登場しない話では、実際のところ、どこが舞台になつてゐるかは判じ難いのである。

ところが、イヨチ人とイシカラ人の登場する話は、ほとんど沙流・胆振および千歳地方の伝承に限られる。特にイシカラ人はそれ以外の伝承には登場しない（ただし、女性を主人公とする話は除く）。すなわち、確実に日本海沿岸を舞台にしているとみさせる話は、沙流・胆振・千歳の伝承に限られるということが、今まで見逃され続けてきた点である。

また、ヤウンウル対レブンクルという図式のもとでは、イシカラ人はイヨチ人やシヌタフカ人とともに、ヤウンクル「陸の人」の側に所属するもの、言い換えれば主人公の側の人間とされてきた。榎森（一九七九・八八）でもイシカラ人はヤウンクルの一覧表の筆頭に挙げられているし、「このユーカーラに登場するポイ・ヤ・ウン・ペに味方する首領たちはイシカリ・ウン・クル（石狩人）、イヨチ・ウン・クル（余市人、なお余市の原名はイオ

チ）のように石狩湾地域の地名を冠している」工藤（二〇〇五・二二〇）のような記述も、そうした認識を前提にしていることを示している。しかし、イシカラ人とイヨチ人の登場する話を具体的に読み限り、物語における両者の役割は大きく異なっている。

次ページ表2の出版

- 1…金田一京助（一九三二）『アイヌ叙事詩ユーカーラの研究』東洋文庫 鍋沢ワカルバ（沙流）口述「虎杖丸」には五つの異伝の記録が知られているが、ここでは、最も有名なワカルバ口述のもので代表させる）
- 2…6…金田一京助・金成まつ（一九五九・六六）『アイヌ叙事詩ユーカーラ集』I-VIII 三省堂 金成まつ（胆振）口述
- 7、9…金田一京助（一九六八、一九七五）『アイヌ叙事詩ユーカーラ集』VIII、IX 鍋沢ワカルバ口述
- 8…金田一京助（一九六八）『アイヌ叙事詩ユーカーラ集』VIII 平村コタンピラ（沙流）の伝承を知里幸恵（胆振）の口述によって記録。
- 10…13…北海道教育委員会（一九七五）『アイヌ民俗文化財（ユーカーラシリーズ）』I-28 金成まつ口述
- 14…16…鍋沢元蔵（一九六九）『アイヌの叙事詩』門別町郷土研究会 鍋沢元蔵（沙流）口述
- 17…Batchelor, J.（一九九〇）. Specimens of Ainu Folk-Lore IX. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 18 口述者不明だが、沙流方言の話者。
- 18…千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座（二〇〇八）『ユーラシア言語文化論集』10 白沢ナベ（千歳）口述

表2. これまで公刊されているおもな英雄叙事詩におけるイシカラ人とイヨチ人の役割

○は主人公の味方側、●は敵側であることを表す。

	表題	イシカラ人		イヨチ人	
		敵・味方	物語中の役割	敵・味方	物語中の役割
1	いどり 虎杖丸の曲	●	ポンチュフカ、レブンシリ、ポンモシリ人などのいわゆるレブンクルと共闘して主人公と戦う。妹は主人公に殺される。	○	主人公とともにシララベツ人、カネベツ人などの敵と戦って殺される。
2	小和人	●	兄は主人公の妹（主人公の敵）に味方しようとして、自分の妹に殺される。弟は主人公の妹と結婚し、主人公に鎧兜を剥ぎ取られて殺される。		
3	神造頭・神造胴	○	いとこ同士であり、主人公とともにキムント人と戦って殺される。妹がキムント人の妹を倒して、主人公の妻になる		
4	あけ 朱の輪	●	親の仇として主人公に村ごと殲滅される。		
5	余市姫			○	妹は主人公といいなづけであり、自分にいいよるポンモシリ、カイボク、アトウイヤ人を殺す。
6	耳輪の曲	?	いとこ同士であるが、主人公が異母弟であるシリペナ人を切る際に、ついでに切り殺される。		
7	蘆丸の曲			○	妹が主人公といいなづけ。
8	同別伝			○	妹ともども主人公に2度殺されるが、後に何事もなかったように主人公を酒宴に招く。
9	八串の肉い くさ物語			○	主賓として酒宴に招かれる。
10	カニピラッ カ	?	妹が主人公といいなづけで、6人兄弟。主敵カニピラッカと主人公が戦っていると妹が言うのに、助けにこない。		
11	細糸、柔糸	○	いとこ同士。妹は主人公といいなづけ。キムント人と戦う。		
12	天にいる男 天にいる女			○	主人公、トゥニボク、ポンモシリ人とともに、レブンシリ、クロラン人と戦う。
13	私を助ける為 に神が大鯨を 頼んだ	●	親の仇として、村ごと殲滅させられる。		
14	食べ気違い			○	ポイヤウンベと姉を酒宴に招く。
15	余市姫			○	妹が主人公の妻になる。
16	犬育て、 悪者育て	○	主人公の父の伝令でトミサンペチの川尻に集まる。	○	主人公の父の伝令でトミサンペチの川尻に集まる。
17	kotan utunnai oma yukara			○	イヨチ人と主人公の長姉、イヨチ人の妹と主人公の長兄が結婚する。
18	シヌタブカ人、 石狩人と戦う	●	いとこ同士だが、山の中で出会い、決闘になる。		

表2からは、次のようなことが読み取れるであろう（以下、表題名の後ろの（1）などの数字は表2における番号である）。

・イヨチ人は常に主人公であるシスタフカ人の味方であり、主人公とともにレブンクル連合と戦う話が見られる（1、5、12）。これは、これまでの「部落連合」としてのヤウンクル像と合致するものである。

・それに対しイシカラ人は親同士が兄弟といった、血を分けた近親者として描かれることも多いのに関わらず、敵として扱われ主人公に惨殺されるような展開になることが少なくない。これまでの議論で常にユカラの基本的テキストとして考えられてきた「虎杖丸の曲」（1）においても、話の発端はイシカラ人とシスタフカ人の争いであり、どの類話でもイシカラ人の妹は主人公側に殺され、イシカラ人本人はどうなったのやらわからない。つまり、後からヤウンクル連合に加わってくるといふこともない。「朱の輪」（4）や「私を助ける為に神が大鯨を頼んだ」（13）では、主人公の親の仇として村ごと殲滅させられる。

・イシカラ人が敵として描かれているわけではない場合でも、はなはだ英雄らしからぬ扱いを受ける。たとえば「カニピラツカ」（10）という話では、主人公が、いいなづけであるイシカラ人の妹をさらおうとしたカニピラツカと空中で戦っている場面で、妹が家の中にいる兄たちに援護を求めるが、兄たち

は「そんなところで戦っているやつがいるわけがない」といつて、助けにこない。イシカラ人の出番はそれだけである。また、「耳輪の曲」（6）という話では主人公といとこ同士ということになっているのだが、シリペナ人という主人公の異母弟を招いての宴席で、主人公がその男と争いになり刀で切りつける。その返す刀で、話の流れとしては何の敵対者でもないイシカラ人を一刀のもとに切り殺してしまう。そしてその後イシカラ人に対する何の言及もない。

・イシカラ人がイヨチ人や主人公と一丸となってレブンクルと戦うというような話は、これまで公開されている資料の中にはまず見当たらないといつてよい。例外に見えるのは、「神造頭・神造胴」（3）、「細糸、柔糸」（11）、「犬育て、悪者育て」（16）の三つだが、（3）（11）は戦う敵がキムント人という同じ相手になっている。キムント人は榎森（一九七九）ではレブンクルの一員に数えられているが、キムントの語源は「山中の沼」という意味であり、レブンクル「沖の人」の一員とするには無理がある。さらに、（3）（11）ともに主人公とイシカラ人の妹はいいなづけであるが、（3）ではキムント人が自分の妹と主人公を結婚させようとし、（11）ではキムント人がイシカラ人の妹を奪おうとして戦いになる。（3）では、イシカラ人はキムント人に殺され、主人公がキムント人を倒し、イシカラ人の妹がキムント人の妹を倒して話は終わり。（11）ではキムント人との戦いの後、レブンクルたちとの戦いになるのだが、イシカ

ラ人はキムント人に捕まって、主人公によって救い出された後、妹とともに村に帰ってその後の戦闘には参加していない。すなわち、どちらの話でも、イシカラ人は妹の結婚相手をめぐるキムント人との個人的な争いの部分に登場するだけであり、しかもあまり活躍しない。

一方、(16) はカラプト人と戦う話であり、主人公の父の呼びかけで、イヨチ人もイシカラ人もトミサンベチ川（主人公の居城のある川）の河口に集まる（イヨチ人とイシカラ人が顔を合わせる唯一の話と言ってよい）という話で、ヤウンクル対レブンクルという典型的な図式に教えられそうな展開だが、実際にはこの召集がかかった時点で、戦いも物語もほとんど終わっており、彼らはその後何もしない。ただ名前だけの登場場である。

以上のように、これらの資料から見られるイシカラ人の像は、知里のいう「異民族の侵入に対して、本土の連中が一致団結して部落連合というようなものを作り、総指揮者をおし立てて戦っている」というような集団の一員とは、とても認めがたい存在である。

4. 語り手の問題と歴史的背景

これら、イシカラ、イヨチという地名の出てくる英雄叙事詩

は、前述のように沙流・胆振地方にほぼ限られる。これらの物語が成立した時代において、それらの地域の人イシカラとイヨチという名称を、石狩、余市という現実の地域と結びつけて考えていたことは、ほぼ間違いないだろう。そして、少なくともこれらの話から読み取れることは、この話の語り手・聞き手たちにとって、余市の人は主人公の味方であり英雄の一人だが、石狩の人は敵対者か、およそ英雄らしからぬ人物として描かれるべきものだったということである。ということは、当時の沙流・胆振の人々は、石狩よりも余市のほうに、より強いシンパシーを持っていたということになる。

ここで、沙流・胆振という地域が、歴史的にいわゆる「スミンクル」として知られる人々の居住地域とほぼ重なることに注目したい。このスミンクルの名でくくられる集団は、それ以外の地域と、英雄叙事詩以外の口承文芸のジャンル名称や、墓標、基礎語彙の一部などで異なることがすでに知られており、文化的にひとつのまとまった単位をなすものと考えられている。

スミンクルのように、ひとりの惣大将そうだいじょうの下に村落を越えて政治的・経済的に結集したとみられる地域集団は、遅くとも17世紀中ごろまでには成立しており、一六六九年のシャクシャイン戦争の際には、スミンクルの他に、メナスンクル（日高東部から釧路にかけての集団）、石狩、余市、内浦湾の各グループが存在していることが知られている。そしてハウカセを惣大将とする石狩グループが和人側にもシャクシャイン側にも組せず傍観する立

場をとったのに対し、余市のグループは、メナスンクル・スメンクルとともに和人襲撃を行ったとされる（榎森一九八七・八五）。この点から、少なくとも17世紀半ばの時点において、スメンクルにとつては余市のほうが石狩よりシンパシーを感じる存在であったと見ることは不可能ではないだろう。

このような集団がいつごろから形成されてきたのかについては明らかにはされていないが、大陸や和人（日本の多数民族）との交易を通じて、特定の首長層に富が蓄積されていったことが、こうした集団の大きな形成要因であっただろうということは、衆目の一致するところである。そして、英雄叙事詩の内容もこうした交易に関連する争いを描いたものであることが、すでに指摘されている。

「主人公を中心とするヤウンクルとレブンクルの抗争の根底に、主人公の所有する富や交易品（たとえば宝物やラッコなど）をめぐる争いが内在している場合が多い、ということも指摘しておかなければならない」（榎森二〇〇七・九三）

しかし、物そのものを取り合うことが戦いの主要な原因となっている話は、それほど多くない。榎森（二〇〇七）が「ラッコ」を例に挙げているのは、「虎杖丸の曲」（一）を念頭に置いての発言だと思われる。この話ではポンチュツカ、レブンシリ、ポンモシリといった、伝統的にレブンクルに分類される人々と、主人公であるシヌタツカ人の争いから話が始まる。その争いの発端になるのはたしかにカネラッコ「黄金のラッコ」であり、

上記のレブンクルたちが石狩湾に出没するそのラッコを捕まえるために競い合い、命を落としているのを尻目に、主人公であるシヌタツカ人が横合いからそれを捕まえて、自分の居城に持ち帰ってしまう。そこで、レブンクルたちがそのラッコを奪い返すためにシヌタツカを襲撃し、主人公が兄たちとともに迎え撃つことになるという展開になっている。

ラッコといえはすでに十七世紀初頭において（石狩湾ではなく）千島から北海道東部を経由してもたらされる貴重な交易品として記述されているものである。しかし、この話でレブンクルたちは単にラッコを自分の村に持ち帰るために奪い合っているのではない。それを捕らえたものがイシカラ人の妹と結婚する権利を得るといふ設定になっているのである。しかも、この物語の中でイシカラ人の妹は、主人公の視点から「醜い女」として描かれているのであり、レブンクルたちの目的は、彼女自身を得ることより、その兄であるイシカラ人との姻戚関係を得ることにあると考えたほうがよい。したがって、「醜い女性との結婚をめぐつて、石狩湾にはいないはずのラッコを追うレブンクル同士の命がけの争い」というこの話の発端部は、「北海道側の有力者に貴重な交易品を提供することによって姻戚関係を結び、交易ルートを確保するための争い」と読み替えることができる。そして、その交易品を別グループの人間である主人公に奪われたことによつて、主人公グループとイシカラグループの争いに発展するという展開だと考えれば、この戦いがなぜ多くの

村々を巻き込んだの全面的な争いになるのかが理解できる。

榎森は「ユーカラ」の戦いの構造のひとつとして、「同族間の矛盾が発端になり、それにレブンクルが介入することにより、最終的にレブンクルとの戦いへと発展していく場合」(榎森一九七九・九一)があるという説明を行っているが、「虎杖丸」ではイシカラ人は最初からポンチュブカ人たちと組んでいるのであり、主人公側もまたレブンクルの一員であるはずのオマンベシカ人を味方につけて戦っている。⁽³⁾すなわち、ヤウンクル対ヤウンクル↓ヤウンクル対レブンクルというように戦いが展開するのではなく、この部分に関しては最初からふたつのヤウンクル→レブンクル連合同士の戦いなのである。しかも、戦いのきっかけになった黄金のラッコは、戦いの途中で主人公の手からオマンベシカ人の妹に手渡される。言い換えれば、イシカラと手を結んでいたレブンクルグループが手に入れるはずだった交易品が、イヨチと同盟関係にある主人公の手によって、主人公側と組んでいるレブンクルの手に渡るといふ展開なのである。

このように見えてくると、主人公との姻戚関係が、イヨチ人とイシカラ人とで少し違う設定になっていることも、理由のあることと考えられる。

表2からわかるように、イシカラ人と主人公はいとこ同士という設定であるという話が多く(3、6、11、18)、その一方で、イヨチ人はその妹が主人公と結婚することになるか、いいなづけであるという設定が多い(3、5、7、15)。物語中で語られるこのような

姻戚関係を、同盟関係の明示的表現とみなすならば、イシカラとの関係は、イヨチとの関係より一世代前の同盟関係を反映していることになる。すなわち、イシカラとの関係は自分の親の代で築かれたものであるが、イヨチとの関係は自分の代で築かれるものだということになり、もともと親の代までイシカラと同盟関係にあったシヌタブカが、主人公の世代で同盟相手をイヨチに切り替えたという設定になっていると解釈することが可能である。

千歳の伝承である「シヌタブカ人、石狩人と戦う」(18)では、主人公が山中で初めて出会った若者と獲物のことで争いになり、決闘することになる。決着がつかぬまま別れて家に戻った後で、その若者が自分のいとこであるイシカラ人であったことを知るが、その後二度と会うことなく終わるといふ話になっている。すなわち、いとこ同士でありながら、一生にただ一度しか顔を合わせず、しかも戦い合うのである。これはかつての関係が、主人公の代以前に解消してしまったという設定であることを象徴する格好の例であろう。

アイヌ語テキストの存在するユカラの資料の中でも最も早い時期の記録である「kotan utunai oma yukara」(17・遅くとも一八九〇年以前に採録)においては、物語がほぼ完結した時点で、それまで全く言及されていなかった主人公の長兄・長姉という人物が唐突に登場し、イヨチ人と長姉、イヨチ人の妹と長兄が結婚することになる。話の流れとしてはとってつけたような場面だが、主人公の立ち位置をはっきりさせるといふ文

脈で考えれば、重要な意味を持つことになる。

ふたたび、現実の歴史的な問題に戻れば、石狩湾が大陸・樺太と松前との交易の中継点として、絶好の位置にあったことは議論の余地がないと思われるが、海保によれば、十七世紀半ばにおいて宗谷・礼文などの大陸・樺太交易の重要な拠点と同盟的な集団を作っていたのは、石狩ではなく余市であったとされている（海保一九八四・三〇三）。しかし、何の軋轢もなくそのような状況になったとは考えにくく、それ以前の時期にこの地域の交易におけるヘゲモニーをめぐって余市と石狩の間に抗争があったと考えることは、きわめて自然である。奥田統己は文化五年（一八〇八）成立の最上徳内『渡島筆記』中に、余市と石狩の争いと和解を主題にした英雄叙事詩が記録されていることを指摘している（本田編二〇〇五・四三三）が、そのような伝承があったということは、ここでの推測を裏付けるひとつの傍証となるかもしれない。

ただし、現在公刊されているテキストにおいては、イシカラとイヨチが直接戦う話はない。双方がひとつの話に登場する「虎杖丸」においても、イヨチ人との共闘は、イシカラ人との戦いが終わってからのエピソードである。いわば、シヌタフカという架空の地の主人公を立てることによって、イシカラとイヨチの対立を間接的に表現しているような構造になっている。それではこのシヌタフカとは、現実の石狩と余市に対してどういう位置関係にあると考えられていたのであろうか？

5. 主人公の居住地

シヌタフカという地名は、現実の地名としては現在確認されていないが、北海道日本海岸の浜益（もとは益毛と呼ばれ、その名は北に隣接する増毛に移ったとされる）周辺とみなす伝承の存在が、永田方正（一九九二）『北海道蝦夷語地名解』で示され、金田一京助の諸著作によって広められている。

久保寺逸彦は浜益について、この地が石狩川河口近くに位置し、かつての交通の要所であったことから、「この地を中心として、大陸文化と日本内地文化とが交渉して、ひとつの文化圏を形成し、さらにその波紋を他に及ぼしたと考えることは、決して無理ではない。ただし、英雄詞曲『ユーカラ』の発祥地とされることも、無理からぬことであろう」（久保寺一九七七・一七六）と述べている。久保寺は知里説に猛反対し、「ユーカラを単なる民族的英雄説話として、歴史的事実の裏付など認めない金田一博士の説に従いたいと思う」（久保寺一九六九・七五九）としているのであるが、この部分では歴史的事実との関連を想定しているようである。

しかし、地勢的な要素からいけば、石狩湾周辺はひとしく交通の要所なのであり、浜益だけが特に有利なわけでもない。むしろ、ここまで述べてきた物語の内容との関係で考えれば、浜益周辺が重要なのは、余市が石狩湾を海岸沿いに西側に出た地

点にあるのに対し、浜益は反対の東側に出る地点に位置し、こと余市が手を組めば、石狩湾から日本海岸への出口がふさがれることになって、石狩側は日本海交易において非常に不利な立場におかれるであろうということである。

石狩と余市の抗争が現実にあつたとして、石狩と姻戚関係Ⅱ同盟関係にあつたシヌタフカ人が、石狩側と争いになり、それと対立していた余市と姻戚関係Ⅱ同盟関係を結ぶことによつて、余市側が石狩側を破つて日本海沿岸交易のヘゲモニーを得る。そういつた流れを、物語の語り手が現実との関係で想定していたすれば、シヌタフカが浜益付近として同定されたということ
は十分考えられる。

海保によれば、十七世紀後半において、浜益はハウカセを惣大将とする石狩グループの領域に含まれることになっている(海保一九八七・二八六など)。一方、榎森によれば、前述のようにシヤクシャイン戦争当時石狩グループは傍観者的な立場を保ち、和人襲撃を行わなかったが、浜益は余市とともに蜂起したということになっている(榎森一九八七・八五)。このような史実が沙流・胆振のユカラの形成に直接関係しているかどうかは別にして、浜益の人々のこうした立ち位置が、ユカラ中の人物関係に何がか反映されている可能性は、考えてみる必要があるであろう。

6. 結論

以上から、次のようなことが結論として得られる。

アイヌの英雄叙事詩のうちでは、まずオタスツ(オタサム)人を主人公とする話が古い層をなす。これが樺太および北海道全体に伝播した後、その話を下敷きにして、シヌタフカ人を主人公とするユカラが沙流・胆振地方を中心に発生し、周辺に伝播した。そのうちのイヨチ人、イシカラ人が登場する話は、沙流・胆振地方にスムンクルと呼ばれる集団が形成された時代以降に、その居住域で発生し、スムンクル内部で伝承された。それらの物語の内容は、交易をめぐるヤウンクル同士、およびヤウンクルとレプンクルの同盟間の相克を描いたものであると考えることができ、そう考えることによつて、これまで理解不可能だった話の展開や、人間関係の設定が理解できるようになる。そしてそれは現在余市、石狩、浜益と呼ばれる地の間に、かつて現実に生じていた関係を反映したものである可能性がある。

註

(1) 本稿ではアイヌ語をカナ表記で表す。表記法は中川(一九九五)の表記法で統一するが、引用文中ではその限りではない。

(2) 本稿では英雄叙事詩という言葉で、ユカラ、サコロベ、ハウキ、

ハウ、ヤイ(エ) ラフなどと呼ばれる物語群、すなわち一定の形式によって語られ、超人的な力を持った人間を主人公とし、その戦いを描いた物語群全体を指すことにし、ユカラ以下はそれぞれの地域でその名称で呼ばれている物語を指すことにする。また、イシカラ、イヨチなどのカタカナ表記は、それらの物語内での地名を指し、石狩、余市などは、現在北海道内でそう呼ばれている地域を指すことにする。

(3) オマンベシカ人が主人公といふ点も、この次に書いたことを照らし合わせれば大きな意味を持つ。他にもいわゆるレブンクルが主人公と姻戚関係にあることを示す話も多く、ヤウンクルとレブンクルが、相容れない敵対関係のみあったと考えられていたのではないことを示している。

(4) 榎森(一九八七・八五)の地図では、現在の増毛になっているが、永田(一九九一・二三)では、「浜益郡」について、「元禄郷帳ニ『マシケ』トアリ正徳図モ同シ而シテ今ノ天塩国増毛ハ『ポロトマリ』トアリ後世浜益ト称スルハ『ポロトマリ』ヲ増毛ト称シタルニヨリ浜ノ字ヲ付加シタルノミ」とあるので、シャクシャイン戦争当時のマシケは現在の浜益近辺と考えられる。

参考文献

浅井亨一九七二『アイヌの昔話』日本放送出版協会

榎森進一九七九「ユーカラの歴史的背景に関する一考察」『史潮』

新5号

榎森進一九八七『アイヌの歴史』三省堂

榎森進二〇〇七『アイヌ民族の歴史』草風館

海保嶺夫一九七四『日本北方史の論理』雄山閣

海保嶺夫一九八四『近世蝦夷地成立史の研究』三一書房

海保嶺夫一九八七『中世の蝦夷地』吉川弘文館

金田一京助一九一四『北蝦夷古謡遺篇』甲寅叢書刊行会

金田一京助一九三一『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東洋文庫

工藤雅樹一九八四『古代蝦夷の社会―交易と社会組織』『歴史

評論』四三四 校倉書房

工藤雅樹二〇〇五『古代蝦夷の英雄時代』平凡社

久保寺逸彦一九七七『アイヌの文学』岩波新書

知里真志保一九五三―四「ユーカラの人々とその生活」『歴史

家』二―三号…『知里真志保著作集』(一九七三 平凡社)

所収。引用は知里一九七三から。

知里真志保一九五五『アイヌ文学』元々社

中川裕一九八九「ユーカラ」『よみがえる中世』4 平凡社

中川裕一九九五『アイヌ語千歳方言辞典』草風館

永田方正一九九一『北海道蝦夷語地名解』北海道庁

萩中美枝一九九五『八重九郎の伝承(3)』北海道教育委員会

本田優子編二〇〇五『アイヌの歴史と物語世界』札幌大学ペリ

フェリア・文化学研究所

(なかがわ・ひろし／千葉大学)